

淡路昆虫同好会 10周年によせて

奥 谷 禎 一

淡路昆虫同好会創立10年を迎えたこと、誠によろこびにたえない。十年一昔という言葉があるが、同好会を支えた人々の苦勞は大変なものであったにちがいない。限られた人口の中で、昆虫に興味をもつ少数の人々に支えられた同好会は財政的にも人材の面でも楽ではなかったであろう。深く敬意を表するものである。

今までの10年は、淡路の自然破壊も前半はゆるやかに、後半はスピードアップされた感じがする。恐らく、次の10年は、鳴門大橋の架橋もあり一層スピードアップされそうな様子が見える。淡路は“花とミルクの島”と宣伝されているが、私の見る所では、“観光と自然破壊の島”としかうつらない。瀬戸内海国立公園地域まで人工物がのさばりだした。この有様では、一日も早く淡路の昆虫相の解明を急ぎ、破壊によりどのように変化するかをしらべておく必要がある。その一つの手がかりは、植生調査の結果(1971年に神戸女学院大の矢野悟道教授らにより行われ、翌年県より印刷されている)がある。飛翔力や分散力の強い種類は困難ではあるが、その弱いものの場合、例えばクチキコオロギやヒメハルゼミでは、産地のみを記録するのではなく、探査した地区も明記して、見落としはあると思われるが、発見できないといった記録も必要であろう。ヒメハルゼミの最初の記録は八木村馬廻であるが、正確な場所はわからない。しかし、シイカシ林は成相寺にしかない点から考えて、ここに違いないと思われるが、今日では全くいない。諭鶴羽山の分布状態から想像をたくましくすると、山頂の原生林にはずっと生息していて、谷沿いに下ってきて、その先端が成相寺であったと思われる。その後、山は伐採され、一部には植林が行われ、遂に山頂に発生したゼミも谷を下ることができなくなり、現在の状態となった。あるいは、昭和8年当時の成相寺のシイ林はもっと密であったのかも知れない。また、成相川にはゲンジボタルが多数生息していて、“成相ボタル”と呼ばれていたが、ダム建設と共に姿を消し、今日のは滋賀県からの移入だと聞いている。このようなことも正確な記録をとどめておかないと、後世の混乱のもとになりかねない。現在では色々の昆虫について、密度をうまく表現できないが、できれば密度についての記録も必要であろう。ただ一番困るのは、正確な記録が出るとマニアにねらわれ、ものによってはたちまち絶滅してしまう可能性もあることである。

最後に、私が淡路の諸兄に望みたい緊急を要する問題は、海浜性昆虫の調査である。海岸は次々に埋立てられ、海の汚染もひどくなっている。岩礁に、砂浜に、特種の昆虫が棲んでいるが、

海の汚染で死滅するものもあるであろうし、埋立ててしまえば、全くいなくなると考えられる。恐らく、オオヒョウタンゴミムシなどは本土では、もう生息地はないかも知れない。そのほか、いろいろな海浜の昆虫が失われたにちがいない。

もう一つの緊急課題は、マツの枯損に対する殺虫剤の航空散布であろう。現在の技術では、マツの枯損を減らすには、マツノザイセンチュウの運搬者であるマツノマダラカミキリの密度を低下させる方法しかない。そのために行われる航空散布であるが、生態系に及ぼす影響はいかにも大きい。私の知る限りでは殺虫剤に対して最も弱いのは膜翅目類のようで、空散の行われた地域ではアシナガバチなどが殆どいなくなっているのではないかと心配される。食葉性昆虫の有力な天敵が減ることは、かえって他の害虫を増加させることになるのではないだろうか。人伝てに聞く所によると、ウグイスの営巣が空散の翌年では半減するということである。林業関係者では調査のできない問題である。調査法は色々あるが、関心のある方には私の用いた方法をお伝えしたいと思っている。

最後に、淡路昆虫同好会が今後さらにユニークな発展をとげ、日本の昆虫同好会のリーダーになることを祈る。

(神戸大学教授)

先山のヒメハルゼミについて

昨年(1975)の7月21日、青雲中学校生物班の梶田、山形両君が、先山東茶屋の横でヒメハルゼミ *Euterpnosia ohibensis* Matsumura の合唱を聞いていたが、本年(1976)7月22日には、青雲中学校生物班員の川臨元浩君が、先山でヒメハルゼミの♂を1頭採集した。場所は東茶屋から加茂の方へ少し下ったあたりの原生林中で、昼でも暗いようなところである。筆者も少し後で同じ場所へ行って鳴き声を聞き、また、その近くで脱皮殻を採集した。なお、合唱から推察すると鶴鶴羽山よりは少ないが、付近の環境もよく、かなりの個体が発生しているものと思う。

(梶田 久)